

# 琉球大学学術リポジトリ

[書評] 山田孝子(YAMADA, T.)著 『南島の自然誌：  
変わりゆく人-植物関係』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲間, 勇栄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/34191">http://hdl.handle.net/20.500.12000/34191</a>

## [書 評]

山田 孝子 (YAMADA, T.) 著  
『南島の自然誌—変わりゆく人-植物関係』  
昭和堂 2012年 389 ページ

仲 間 勇 栄\*

### はじめに

本書は、今から28年前に、著者が「リトルワールド研究報告」(第7号、1984)で「沖縄県、八重山地方における植物の命名、分類、利用—比較民族植物学的考察」の題で掲載した論文に、他の著書や学術誌で発表したものを追加して、取りまとめたものである。

本書は、「南島の自然誌をとくに人-植物関係という点から描く」ことを主眼に置いて、方法論的には、エスノ・サイエンスや比較民族学の先行研究の手法を取り入れて、グローバルの視点から、南島の自然誌を位置づけようとしている。その論点は多岐にわたっており、それらを詳細にコメントするには、与えられた紙幅の範囲を超える。そこで本書で論じられている八重山関連のテーマに絞り、その分析成果と、それに関する若干のコメントを付して、私の書評の責務を果たしたい、と思う。

### 1. この本の目的と方法

本書のタイトルは『南島の自然誌』である。ここで著者が使っている自然誌の概念とは何か。著者はこれまでの先行研究を整理した上で、自然誌を次のように定義する。「自然誌を、人類は所与としての環境に関与してきた、認知、類別から生活への活用をいたる自然への人々の生活のなかでの関与の総体の記述として捉えるものであり、自然誌とは人-自然関係をめぐる総合的知識と活動の体系の記述である」。この前提に立って、著者は八重山の自然誌を、人-植物との関係から、個別文化の地域性と共通性と連続性を考察しようとする。

これらの目的を達成するため、本書ではエスノ・サイエンスと比較民族植物学の手法が取り入れられている。詳しい先行研究の内容検討は本書に譲ることにして、各論で用いられている手法には、コンクリンの語彙素分析、Jaccardの類似度指数、Moutford法による群分析、野村・シンプソン指数などが使われている。コンクリンの語彙素分析手法は、植物の基本名、他の植物との対照による対照名の構造の解明に応用される。西表島、鳩間島、波照間島の3島、また八重山諸島と東カロリン諸島との植物利用の類似性については、Jaccardの類似度指数、Moutford法による群分析、野村・シンプソン指数などが使われる。

各島の調査は、1973年4月から1975年10月(予備調査・本調査)にかけて、鳩間島が延べ8カ月間、西表島西部(祖納、星立)が延べ8カ月間(計5回)行われている。他の2島と違って、波照間島だけは1980年7月から9月までの約2カ月間に調査が行われている。これらのデータをもとに、2003年から2005年にかけて、延べ2カ月間に計3回、波照間島と鳩間島での植物利用の動態についての補足調査が実施されている。したがって、本著書で収録されている3島の植物民俗

---

\* 琉球大学教授 Professor, University of the Ryukyus

資料は、1970年から1980年のころに、島民が記憶している植物民俗知識の集成とみることができるところ。そのときのインフォーマントは、3島ともそれぞれ2名となっている。

## 2. 八重山地方における植物の命名と分類の地域性

八重山諸島でのフィールド調査地は、波照間島、西表島西部、鳩間島の3箇所である。これらの地域で採集した野生植物種で個別名をもっていたのは、波照間島で195種、西表島西部で257種、鳩間島で115種となっている。これら採集した野生植物について、各島における植物の命名、類別、分類という点から人-植物関係を考察している。

植物の命名では、各植物の個別名を基本名（他の植物の個別名でないもの）と対照名（他の植物の基本名に属詞が付加されたもの）に分け、それぞれ語彙素分析を行い、各島における植物の命名の構造を明らかにしている。さらに、植物種と個別名の島間の比較を通じて、八重山地方における植物命名法の地域性について考察を加えている。

植物の命名における特徴の1つは、基本名をもつ植物の同定の仕方が、植物のあらゆる特性を考慮して行われている点である。その着目する性質（弁別素）は、花、葉、茎、果実などの諸器官の形状や色、臭気、味、毒性、乳液といった植物の多様な形質と、生育場所、有用性、動物の食草、外来のもの、などがあげられる。

植物の命名（基本名）の2つ目の特徴は、個々の植物の命名にあたっては、さまざまな表現がとられるが、他との弁別のために着目した属性を直喩的に表現する語彙が多く用いられている点である。それに付随して、ときには動物の形態、人名や地名などを用いた隠喩的表現がとられる例も見られる。とくに人名や地名が外来植物の個別名を構成する語彙素として用いられていることは、新しい植物が識別され、命名されていく過程の1つのモデルと考えられる、としている。

対照名を持つ植物の同定の特徴の1つは、同じ基本名をもつ他の植物との形質上の類似を前提とし、それと同時に、その両者を弁別しうる差違にも着目して命名され、その名称はその弁別素を属詞として基本名に付加した構造になっている点である。

対照名同定の特徴の2つは、属詞に用いられるカテゴリーが、色、大きさ、臭気、硬さ、生育場所、動物、原産地、性などと、多様にわたっているが、これらの属詞のほとんどは、植物の属性を直接的に表現するもので、基本名の識別に用いている弁別素と基本的には変わらない点である。

対照名同定の特徴の3つは、色（赤・白）、性（男・女）、真偽（本当の・にせの）などの文化的対立概念をメタファーとして用いることもある点である。さらに栽培種の命名に原産地などの地名を属詞とする例や、人が食べる植物を牛が食べるという点を弁別素とした例なども見られる。

植物の個別名に対照名がみられるということについて、著者は、新しい植物名を無限に作り出してゆくのではなく、まず既知の植物との関連性に基づいて、新しい植物を認知し位置づけてゆくという手順があるという。それを植物認知の構造として捉えている。

以上の認知の仕方は、コンクリンのハヌノーの事例分析との比較からみても、植物の対照のさせ方に、文化を超えた一般的傾向として認められる、と著者は指摘する。

### 2-1. 植物の分類からみる認知の構造

3島間の分析から、著者は、人々を取り巻く植物は、生活形、葉の形、落葉性、有毛性、花や花穂の形、果実の有刺性、木の肌や茎の色、有毒性、有用性など、植物のさまざまな属性に基づいて類別され、多様なカテゴリーを形成している、と総括する。そしてその類別カテゴリーを、包括名をもち植物の生活形が類別基準になっているものを生活カテゴリー、包括名をもたないが植

物間に何らかの類縁関係が認められるものを類縁カテゴリー、の2つの型に区別して考察する。

波照間島、鳩間島、西表島の3島間の共通の生活形カテゴリーには、木、草、葛、羊歯の4種類が認められるという。3島間で相違がみられないのは、波照間島・鳩間島に対する西表島の植物相の大きな相違が、類別の仕方には反映していないことだとしている。著者によれば、この生活形カテゴリーのような類別的認知は、植物世界の認知の早い段階で成立する可能性が考えられる、としている。

## 2-2. 命名・分類にみる地域性と普遍性

1つは、命名法にみる島ごとのヴァリエーションの違いである。命名のヴァリエーションを包括的に眺めると、3島で相同の個別名をもつ植物は38種、2島間だけで相同のものは19種にすぎない。波照間島では、個別名をもつ195種の野生植物のうち、島特有の名称をもつ植物は145種(74.3%)に及ぶ。また、西表島では257種のうち200種(77.8%)、鳩間島では115種のうち70種(60.9%)が、それぞれの島特有の名称をもっている。他の島でも命名されているが、島ごとに個別名が相違する植物は、個別名をもつ植物全体のうち、波照間島で34.9%、西表島で23.3%、鳩間島で47.8%を占め、島ごとに植物の命名法を工夫、伝承する傾向がみられる。

植物のさまざまな特徴に着目して命名される個別名の命名法は、3島間に大きな差は認められない。しかし、ある特定の植物についてみると、どの特徴に着目するのかという点では、島ごとに異なる場合が多く、その結果が個別名の相違となって表れている。つまり、植物の命名にあたって、どの特徴に目をつけるのかということは、植物ごとに随意であり、ローカルな人々の関心のあり方に大きく影響されるものである。このことが命名法における地域性を作り上げている。

2つは類別化にみる島ごとの違いである。八重山諸島の3島においては、植物を3弁別特徴(蔓性、木質の幹、羊歯状の葉)に基づいて、木、草、蔓、羊歯という植物の生活形に相当する範疇に類別するという点で、分類の基本構造と論理には相異はみられない。しかし、植物のなかには、2つの弁別特徴をともにもつものもあり、植物を類別するにあたって、どの弁別特徴を優先させるのかということが重要な問題となる。実際、羊歯状の葉という弁別特徴を考慮する順序が島ごとに相異しており、その結果、分類の内部構造が異なることになっている。

生活形カテゴリーへの類別は、自然知の体系のなかで細部にわたって決定されているというのではなく、実際の適用にあたっては、個人個人が経験的に学び、柔軟に対応していくものである。そのことが八重山地方における地域ごとの内部構造の違いをもたらし、個人ごとの類別法の違いとして現われている。つまり、波照間島、西表島、鳩間島の事例は、植物の分類がローカルな文化的実践のなかで育まれるものであることを示している、といえる。

## 3. 八重山における植物相の活用

### 3-1. 植物の利用形態

八重山地方における民族植物学的調査は1970年代後半から1980年代初めにかけて行ったものである。この調査で確認できた陸上植物は、波照間島で314種、西表島で368種、鳩間島で242種、合計540種となっている。そのうち自生種は351種、外来種は59種である。外来種のうち帰化種は44種、栽培逸出種は15種である。栽培種は130種である。

410種の野生植物は、すべてのカテゴリーで利用されるが、カテゴリー間で見ると、有用種数に大きな違いがある。野生植物利用では、食物利用が98種と最も多い。次いで薬用が93種、飼料が78種、儀礼が69種となっている。これらに続く有用項目は、建材、燃料、家庭用具、道具などである。一方、衣類、装飾品、魚毒、舟材、標識などの利用項目には、有用種数が少ない。カ

テゴリーごとの有用種数の多少は、その土地における植物の人の生活に果たす役割の特徴を示す、八重山においては、食物、薬、儀礼への野生植物利用が重要な意味をもっている。

### 3-2. 食用・薬用への利用

八重山地方における食用野生種（食料、香辛料、嗜好料）は合計 168 種（共通種は 1 種と換算）で、それを各島ごとにみると、波照間島が 90 種、西表島が 117 種、鳩間島が 89 種となっている。野生食用植物の利用で貯蔵がみられるのはソテツのみである。他の植物はいずれも必要ときに採集して利用している。これは八重山では四季を通じて植物が生育し、食用植物が自然状態で蓄えられる自然環境にあることに由来する。

薬用利用の植物は、栽培種が 15 種、野生植物が 93 種、合計 108 種で、その処方箋の総例数は 170 例となっている。島ごとには、波照間島が 57 種 74 例、西表島が 51 種 62 例、鳩間島が 40 種 54 例となる。3 島の合計で薬効の種類とそれぞれに利用できる植物数を多い順に示すと、胃腸病、発熱、のぼせ、食中毒、はしか、婦人病、産後、風邪、腫物、切り傷、虫毒、神経痛、その他、となっている。その処方の仕方は、煎服、絞り汁を飲用するのがほとんどである。薬草を乾燥させる事例は少なく、そのまま煎じて飲むのが多い。また酒に漬けたり、乾燥保存したり、あらかじめ備えておいて利用する例は少なく、必要ときに採集して利用するのが多い。

### 3-3. 利用形態にみる普遍性と地域性

1 つは象徴的世界（盆栽、供え物、稲作儀礼、魔除け）と結びついた植物と本土文化との関連である。特定の植物の象徴的意味づけは、局地的である傾向が強く、八重山の 3 島間でもその違いは大きい。しかし、実際に用いている植物種の違いを無視すれば、植物と儀礼との関係性自体には、八重山と本州の間でいくつかの共通点が認められる。しかし、日本文化からの明らかな影響を受けた象徴的植物の存在はそれほど多くなく、全体としては八重山地方固有の宗教、世界観が底流となっている、といえる。

2 つは、野生植物利用に地域差がみられることである。3 島で採集した野生種は 410 種、このうち 3 島から共通して採集できたのは 97 種、波照間島と西表島だけで採集できたのは 27 種、波照間島と鳩間島だけというのが 32 種、西表島と鳩間島だけというのが 24 種、残りはいずれか 1 島だけで採集できた種である。波照間島と鳩間島は自然環境の類似性から、共通種数に基づく類似度指数が一番高い値を示している。これらの事例内容から、各島における野生植物利用は、八重山地方全般において有用性の評価が定まっている植物の利用を核としながら、各島固有の植物の有用性に着目し開発してきた、といえる。そして、このことが野生植物利用にみられる地域差の一因ともなっている、と著者は指摘する。

3 つは、用途からみた地域性の違いの要因が一律でないことである。食物、建材、燃料、道具、飼料、薬などの項目のなかで、食物、建材、燃料、道具では西表島で利用種数が多い。これらの差は、生業活動や植物相、とくに木本類の利用を直接反映したものである。飼料、薬の利用種数では波照間島が最多となっているが、これは島民の関心の度合いによるものである。他方、肥料、魚毒、装飾、換金、防風、衣服、俗信などの項目では、利用種数の地域差は 4 種以下と少ない。

以上のように、項目ごとの利用種数に表れた地域差は一律ではない。つまり、植物相の因子のみではなく、生業活動、生活様式、関心の度合いなどが複合的に作用しあっている、といえる。有用植物の種類を用途ごとに比較すると、以上のような地域差を認めることができる。その地域差は、波照間島・鳩間島対西表島、西表島・鳩間島対波照間島、波照間島・西表島対鳩間島と、利用項目ごとに多様な現われ方をする。そして、植物の種類にみられる地域差には、植物相の相違、地理的・歴史的隔離、都市化の影響、有用性の着目の仕方の恣意性などの要因があげられる、と

いう。

#### 4. 本著書の意義と評価

本書の最大の学術的成果は、まず第1に、これまでの研究成果も取り入れながら、八重山地方における民俗植物知識の全体像を民俗誌として体系づけたことである。

八重山地方における植物民俗誌の調査は、波照間島、西表島西部(祖納、星立)、鳩間島の3箇所を選定して、1973年から1980年までの間に分散して行われている。その間に採集した植物数は、3島の合計で540種、うち野生種は410種、栽培種は130種となっている。これらのデータは、分類学上の科ごとにまとめられ、本書の第5章に掲載されている。そこには、島ごとの方言名とその利用の詳細が、フィールド調査データをもとに整理されている。

これらのデータが基礎となって、本書では、八重山地方における人と植物の関係の地域性・共通性・連続性などの自然誌の実態が分析されている。そういう意味では、この植物民俗資料は第1級の基礎資料として位置づけられよう。

本書の第2の意義は、波照間島、西表島、鳩間島、ブンラップ島という孤立した島嶼環境における人と植物の関係について、コンクリンの語彙素分析、Jaccardの類似度指数、Moutford法による群分析、野村・シンプソン指数などの手法を応用して、はじめて体系づけたことである。これによって、各島間の植物の命名・分類・利用の地域性と共通性と普遍性が明らかにされている。この手法は他の島々での島民の自然認識のあり方を探る際にも、1つの分析ツールとして、今後、活用されていくことであろう。

第3に、著者は、波照間島、西表島、鳩間島の3島の比較の中で、共通種の利用を指摘しつつ、種レベルの地域差の違いについて強調している。しかし、その地域差の有意性は、ある期間内に調査した3島で採集できた植物種の数や利用法によって、影響を受けている可能性も考えられる。またインフォーマントの出自や経験や知識によっても、その島の植物民俗情報の量は左右されることもある。正確な3島の地域差をみるためには、各島民の系譜や、彼らの植物知識の歴史変遷などを、ある時期、たとえば、戦前・戦後・復帰以降というように区分して比較すれば、各島間の地域差や動的把握もより鮮明なものになるだろう。しかし、この作業は不可能に近い。なぜなら、島民の頭の中に記録されている植物民俗知識は、生活様式の変化などで薄れ、また消滅していくこともあるからである。したがって、本書で分析されている地域差は、八重山地方一般というより、1970年～1980年頃の3島の事例として、理解しておきたい。

第4は、八重山地方でなぜ3島だけに調査地を限定したのか。著者は、3調査地の選定理由として、次のようなことをあげている。まず鳩間島については、かつて500人の人口を支えた活気のある島で、島の中央の小高い中森御嶽に豊かな自然植生が残っていること。西表島西部(祖納・星立)については、島の自然を生かしたイノシシ猟をはじめとする生業が営まれていること。波照間島については、具体的な記述はないが、他の島との比較のためだとしている。その他の候補地として、西表島東部の古見、小浜島、竹富島、与那国島などは考えられなかったか。さらに八重山地方の特徴を把握するために、宮古諸島(多良間島など)や沖縄諸島の事例との比較調査ができたか。

評者は、最終的には、琉球列島における植物民俗の地域的特徴とは何か、をイメージしているが、その1分野—八重山地方の植物民俗の全体把握について、今回の著書が、その研究の先鞭をつけてくれた、と考えている。

## おわりに

本書は、八重山地方における植物民俗研究史の中で、新たな研究手法を応用して、はじめて体系づけた学術的価値を有する図書として、今後も引用されていくことであろう。

評者は、農学部に籍をおいて森林文化を研究していることもあって、どうしても発想が生産を意識した農学の視点から、この著書の価値をみてしまう。この著書の学術的価値は、これまで述べたように、植物の命名・分類・利用の分析成果もあるが、著者もこの本の第2の目的で書いているように、八重山地方という1つの地域の民俗的植物知識の全体像を、1つの民俗誌として記述した点にある、と思う。

近年、沖縄の植物のもつ薬用成分が、さまざまな効用をもつことが、分析化学の面から明らかにされ、その価値の開発と商品化が進んでいる。睡眠に効果のあるアキノワスレグサ、ニキビに効くオオバギ、健康茶として飲用されるシロノセンダングサなど、その多くは島民の植物民俗の知識に由来する。これらの民俗知識こそ、今後、植物資源の新たな開発に結び付くヒントを与えてくれるものと期待している。